

ごんぎつね（児童読みに多くみられるへんな読み方）

児童たちの読み声に多くみられる悪い読み方、へんな読みぐせがあります。次の文章で説明します。

ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、そのいせいのいい声のする方へ走っていききました。

と、弥助のおかみさんが、うら戸口から、

「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、

ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。

★蚊の鳴くような「小声読み」が多い。このような児童には、声に響きを与えよう。共鳴がついた声ならば、遠くまでよく届く声になる。共鳴については、第13章「表現よみ指導方法（その7）」を参照。

★「ごんは」、「いわし売りは」、「副助詞「は」を、「ワ」と発音しないで、「ア」と発音する児童がいる。

★「物置のそばをはなれて」を、「物置のそばはなれて」のようにある語句をとばして読む。とばし読み。

★「行きかけますと」を、「行きかけると」のように他の語句に入れ代えて読む。いれかえ読み。

★「ぴかぴか光るいわし」を「ぴかぴかに光るいわし」のように「つけたし読み」をする。

★「売る声がします。」を、「売る声がしまアアす。」と文末を伸ばして跳ね上げる読み方をする。

★「しました」を「しましたアア」、「です」を「ですアア」、「でした」を「でしたアア」と、文末を跳ね上げて伸ばす読み方をする。疑問文や質問文などは文末が上がったり下がったりしますが、肯定文は通常は文末にいくほど声量が低く下がるのがふつうです。「です」の「す」、「でした」の「た」は、短く、軽く、押さえて、下がる、ぐらいでよい。

★「と、弥助のおかみさんが」の「と」を、「とオー、弥助のあかみさんが」のように、高く、跳ね上げた読み方をする児童がいる。「と言いました」の「と」も同じ。これら助詞の「と」は、軽く、押さえた読み方でよい。

★児童たちは、上手な読み方とは、早口読み、すらすら読みをすること、つかえないで読むことだという誤った理解をしている。早口読みは意味内容を声で表現しようとしなくてよい。早口読みとかゆっくり読みとかではなく、意味内容を声に乗せようと意識する読み方をさせることが重要だ。いつも「意味内容を声に乗せる」を指導の重点として教えることだ。

★登場人物の動作・行動、出来事・事柄の順序・順番が分かるように表現よみさせることだ。「いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。」だれが、どうした、次にどうした、それからどうした、人物の行動の順番が分かるように区切って、短い間を入れて、声に乗せるように読むようにします。

★大きな区切りと小さな区切りを意識して、意味内容を声に乗せるようにします。大きな区切りは、間を広くあけて、小さな区切りは間を狭く開けて読みます。前の引用文では、「ごんは、物置のそばをはなれて、……：「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」までが大きな一区切りです。「ごんは、そのいせいのいい声のする方へ走っていき……：「いわしをおくれ。」と言いました。までが二番目の大きな一区切りです。それから「うちの中へ持って入りました。」までが三番目の大きな一区切りです。大きな一区切りでは、長めの間をあけて読むようにします。